兵庫北部に疎開中、広島で家族が被爆死

原爆孤児 支えた写真

原爆投下から6日で75年。広島平和記念資料館（広島市中区）には今でも、毎年50人を超える被爆者や遺族から数百点の資料が寄贈される。本人や家族が亡くなったり、高齢になり手元に置けなくなったりしたケースが多いという。神戸から移住後すぐに被爆した一家の〝生きた証し〟は3年前に届いた。寄贈したのは疎開先で一人生き残った長男だった。

（小谷千穂）

京都市左京区に住む宮崎善行さん(83)。2017年4月、父親の武二さんと母親のトシヱさん＝当時(32)、妹の康恵ちゃん＝当時(6)＝と則子ちゃん＝当時(2)＝が、原爆の被害で亡くなったことを示す証明書を資料館に託した。乳児だった自分を抱く母と、兵隊姿の父の写真を添えて。「自分がいなくなっても、ここだと残していてくれる」

原爆で家族全員を亡くした宮崎善行さん。遺骨もなく、両親の写真を大切に保管してきた＝京都市左京区

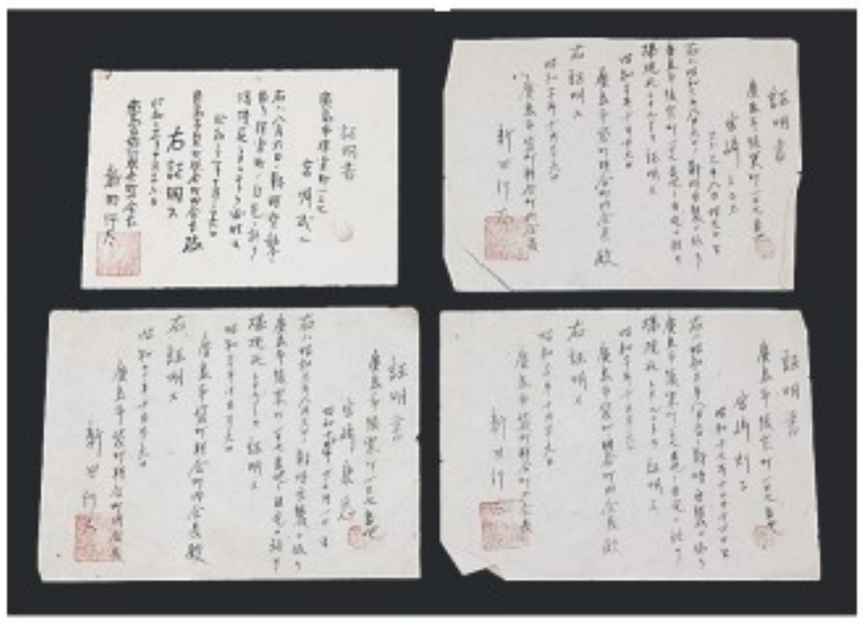
神戸出身の83歳宮崎さん

父母の面影、ぬくもり胸に

ひょうご 戦後75年

宮崎さんは神戸市兵庫区で生まれ育った。体が弱く、妹2人と競うようにトシヱさんに甘えていたという。出征中の武二さんは帰宅すると、童謡「ふるさと」を1小節ずつ歌って教えてくれた。「あの時握ってくれた手のぬくもりが『おやじ』っちゅう感じかな」と目を細める。

1944年、8歳の時に兵庫県北部へ集団疎開し、家族と離れた。翌年7月、体調を崩した宮崎さんを迎えに、武二さんが疎開先を訪れ、広島市に住居を移したと知らされた。神戸大空襲の影響とみられる。家族の元へ帰りたかったが「家の方も生活きついんやろな」と疎開先に残ると決めた。原爆投下の2週間前だった。



父宮崎武二さん、母トシヱさん、妹の康恵ちゃんと則子ちゃんが亡くなったことを示す証明書＝広島平和記念資料館

原爆で孤児となった宮崎善行さんの手元に残された母トシヱさんの唯一の写真。抱いている赤ちゃんは宮崎さん本人

父武二さん（左から2人目）の唯一の写真（いずれも宮崎さん、広島平和記念資料館提供）

8月6日午前8時15分、家族4人は今の原爆ドームがある広島市の旧猿楽町（現中区）の自宅にいた。爆心地でもあり、原爆で町の全てが消し飛んだ。4人は骨も残っていなかったといい、当時の町内会長が記した証明書には「爆焼死」と記された。

家族全員の死を知ったのは終戦直後。他の児童は親が迎えに来るのに、いつまでも来ない。親戚とともに広島へ向かうと、町はがれきだらけ。建物の壁にはガラスが刺さり、灰で覆われていた。自宅の場所を親戚に尋ね、遺骨や遺品を捜したが、食器のかけら一つ見つからなかった。「何か手元に残したい」と小さな石を持ち帰ろうとしたが、「放射能がある」と止められたという。自身も入市被爆し、その後大病を患った。

8歳で孤児となった宮崎さんは、広島の祖母の元でしばらく暮らした。1年ほどたったある日、祖母に怒られた際、母を思い浮かべた。「僕には甘える人はおらん。親がいない。ひとりぼっちなんや」と悲しさがこみ上げた。

その後、親戚の家を転々とし、支援を受けながら大学へ進学し、商社に勤めた。結婚し、今では3人の孫がいる。長い間家族の形見がなく、わずかな記憶を支えに生きてきた。「思い出しては家族の記憶をかきあつめ、今の自分がある」と振り返る。40歳を過ぎ、親戚を介して別々に写る両親の写真が手に入った。被爆から2カ月後に発行された4人の証明書は約10年前に譲り受けた。

寄贈後もコピーした証明書と写真を離さず持つ。「家族が生きた唯一の証し。何よりの宝物」とほほえんだ。

◆

平和記念資料館で毎年開かれる「新着資料展」。昨年度の展示には、宮崎さんの家族の証明書が写真とともに紹介された。加藤秀一学芸課長は「横に並べると、家族全員が寄り添っているようで感動的だった」。展示を見て涙を浮かべる来館者もいたという。宮崎さんは「戦争や原爆とは何か、なぜ起きたのか、学びを深めるきっかけになれば」と願う。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。